

運動の集団化におけるワークショップ形式の授業に関する研究 ～新体操教材の開発に視点をあてて～

松本 大輔*・鈴木 直樹**・塩澤 榮一***・細川江利子**

キーワード：ワークショップ形式、新体操、かかわり合い

1 緒言

現行の学習指導要領では、運動の集団化が運動の内容の一つとして示された。例えば、器械運動では、「それぞれの運動に集団で取り組み、一人一人ができる技を組み合わせ、調子を合わせて演技するような活動に発展させることもできる」(文部省、1999、p.22)とし、集団マットや集団跳び箱、集団鉄棒といった表現の要素を取り入れた運動が内容として示されている。水泳では、「水泳の楽しさを広げる観点から、集団でのリズム水泳などを指導に取り入れていくことも加えることができる」(文部省、1999、p.24)とし、シンクロナイズドスイミングの要素を取り入れた運動が内容として示されている。

既に多くの実践例も紹介され、器械運動では、鷺巣(1998)が集団跳び箱運動の教材化により、個人的な克服型・達成型の楽しみ方だけでなく、集団的、表現的な楽しみ方も可能にし、跳び箱運動の楽しさを広げることができたことを報告している。また、榎山(2001)が、跳び箱運動の楽しさを「タイミングを合わせて跳ぶ、心地よさ」など、グループで行う活動にもひろげる

ことで、楽しみの窓口を広げ、活発に運動に取組み、その結果、跳び箱を乗り越える様々な動きをも身につけることができると報告している。

水泳では、山川(2004)がシンクロの効果を「ゆったりとした音楽を選曲することで、リラックスして浮く動きや男女を問わず手をつなぐ姿も自然と見られるようになる。友達との関わりを深めていく上でも非常に有効な学習である」と述べている。また、田中(2001)は、水中での移動の仕方の着目からシンクロ遊びを水泳に取り入れて実践している。

このように、これまで、個人的な運動とされてきた器械運動や水泳において集団化した教材が授業で利用されるようになってきた。しかしながら、榎山が述べる「結果的に……」という言葉に象徴されるように、集団的な運動は楽しみ方の一つと理解されており、集団による運動が目的というよりは、いわば個人的な運動のための手段としての教材化されているともいえよう。これは、器械運動や水泳における集団的な運動が、個人的な運動の単調さを補う方法の一つとして了解されていると考えられるからではないだろうか。

ところで、鈴木ら(2006)は、「体力を高める運動」において集団的实践として「ワークショップ形式」の授業を実践し、体力の高め方を学ぶ

* 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科研究生

** 埼玉大学教育学部保健体育講座

*** 入間市立豊岡小学校

と共に、運動を生活の中に取り入れていく力の育成を企図した実践提案を行っている。ここでは、体育授業における集団的实践において個人の中に内的文化文脈性を生成していくことが実践提案されている。すなわち、運動というのは、本来、自己が仲間とかかわり、教材や環境とかかわる中で、現象化されている世界であり、それは、一人で取り組んでいようが、集団で取り組んでいようが、実はかかわりあいとして理解されるべきものである。そのような学びにおいて表出される現象が個人として了解されるものが個人化、集団として了解されるものを集団化としてとらえることができ、体育における学びは協働的参加ということになる。一方で、学習内容の固定化によって、器械運動や水泳は、個人化における学習にばかり目が向けられていたといってもよからう。すなわち、運動の特性を弾力化することによって、学習指導要領で示されている集団的な運動も単に手段としてではなく、目的としてその集団化を理解することができ、それ自身が重要な学習内容となるととらえることができる。

そこで、本研究では、「ワークショップ形式」の授業において学習内容としての集団化に着目し、子どもの学びの変化を明らかにすることを目的とする。

2 研究の方法

2.1 研究の進め方

鈴木ら（2006）が提唱した「ワークショップ形式」の授業実践に従って、授業づくりを行い、その授業を分析し、研究の目的に迫ることとした。

授業分析の方法は、第三者的な観察者についてはScriven（1973）が提唱した「Goal-free evaluation」を用いることとし、授業者は授業リフレクション（Ryan, 2005）をして、子どもの学びについて、分析することとした。またこの際に2名の分析者が互いに干渉しあうことな

く、同じ授業を分析しあうことで妥当性と信頼性を保障することとした。

なお、授業実践の概要を以下の通りである。

実施時期：平成18年 2月から3月におこなわれた授業計6回

実施学年：3年30名（男子14名・女子16名）

運動領域：基本の運動

授業実践者：S教諭（16年目） 教務主任

授業観察者：2名

2.2 ワークショップ形式の授業の適用

中野（2001, p.11）は、ワークショップに関して「講義などの一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験して共同で何かを学びあったり創り出したりする学びと創造のスタイル」と定義している。また中野（2001, pp.151-159）は、ワークショップの意義として、「関係の豊かさ」「自分らしく生きる」「知恵も力も『関係』の中に生じる」「市民意識の醸成」の4点を挙げている。つまり、ワークショップにおける学習を、知識や方法の獲得としての学習ではなく、その参加者同士の相互の関係性の中での創造の学習であるということの重要性において意義を示しているといえよう。鈴木ら（2006）は、「多くのトレーニング方法や効果的な方法を効率的に獲得したりすることが、目指されるのではなく、授業における文化的実践の中で、体力を高めたい自分が自覚的になり、関係の中で体力の高め方を思考し、関係の中で意味が生成された『体力の高め方』が身につけていくと考えられよう」と述べ、「ワークショップ形式」の授業における獲得としての学習から生成、創造の学習への転換の重要性が示されている。また、湯口（2007, p.126）はワークショップを導入した授業を「『運動のおもしろい世界に参加することで、まず、自分なりのおもしろい世界を探索し、そこに参加している他者と、今ここにもっている私の身体の情報と相互作用させ、新たなおもしろい世界を創発していく』と

いう『場』の中で、参加と創造がリゾーム状に展開する『学び』を保障する学習であると定義し、「ワークショップ形式」の授業における、かかわりによる新たなおもしろさの創発の重要性を述べている。

具体的実践として古賀（2002）や山崎（2006）は「ワークショップ形式」のボールゲームの授業において、かかわり合いを通しての自分たちだけの『マイゲーム』を創りあげる楽しさをあげており、関係性の中における創造の学習としての「ワークショップ形式」の授業の重要性を示している。そして、跳び箱運動による田中（2007）の授業実践や、鈴木（2004a, 2004b, pp.57-61）の報告からも、「ワークショップ形式」の授業における関係性の中での創造、発見、生成の営みの重要性が認められている。

このような参加者同士が相互にかかわりながら、自分たちの運動の楽しさを創造・発見していく「ワークショップ形式」の授業における学習内容について、湯口（2007, p.126）は「モノとのかかわりや、他者との社会的な学びの中から創発される」と述べている。また細江（2006）も同様の指摘をしており、「ワークショップ形式」の授業における学習内容を、かかわりの中から創発されたものとして捉えることができるといえる。

3 教材としての「新体操」

小学校中学年期はその発達段階において「巧みな動き」及び「体をやわらかくする動き」が伸びる時期であり、様々なモノを操作すると同時に自分自身の身体をコントロールする運動の特性は子どもの学習に適しているといえる。さらに、最近の子ども達は、自然と音楽に合わせてリズムをとることができる子どもが多いといわれている。そこで、モノや自己の身体を操作しつつ、他者の身体に共感しながら学習を展開する中で、「ワークショップ形式」の授業を導入することによって、かかわりあいの中から創発

として、学びの変化を引き出すことができると考えられる。このような運動特性を持つスポーツとして、「新体操」が挙げられ、本研究では、「新体操」の要素を教材化し、実践することとした。

これまでの新体操の研究では、中学校や高校の選択の授業として新体操を教材として扱ったもの（小山2002）や、新体操という運動が身体的な発達における効果という点の研究（張・頭川2000）は見受けられるが、小学校において新体操の教材を扱った授業実践はほとんどなく、研究発表されていない現状にあるといつてよい。

そこで、本実践において新体操を教材化するにあたり、まずは新体操の特徴について捉えることとした。新体操の特徴について、最新スポーツ科学事典（2006）の中で、感情の表出を重視した表現体操、音楽リズムと運動リズムを結合させたリズム体操、さらに輪、縄、リボンなどの手具を用いた手具体操という視点から捉えられている。また新修体育辞典（1976）においても同様の記述がみられる。さらに、体操辞典（1978）では、上記の特徴とともに、「個性を尊重し、運動を自由、自主的に行う」「リズムカルな動き作りを通して、調和的なからだづくりをねらい、ボール、棒、金属リング等の手具を用いておこなう」としている。

このように、新体操の特徴を、用具を操作し、リズムに乗り、表現することに見出すことが出来るといえる。これは、現行の学習指導要領の中の「用具を操作する運動」「リズムダンス」「表現」の内容と合致するといえよう。また、集団での新体操について加茂（1978）は、集団での新体操の魅力や、「チームの独創性や、チームがもつ能力の範囲内でリズム構成をし、自分達のチームならではの演技力」であると述べている。

すなわち、新体操を通して、集団で楽しさを創造し、発見することに、子どもたちはふれることが出来ると考えられる。なお、授業の実践にあたっては、競技としての「新体操」を迫

するのではなく、「新体操」における、「モノを操作する楽しさ」、「自分の身体を操作する楽しさ」、「他者の身体に共感し、共鳴する楽しさ」、「リズムに乗って表現する楽しさ」に触れさせながら、身体を外界に対して解放する中で、集団の実践として授業が展開できるように配慮し、「用具を操作する運動」と「表現」「リズムダンス」の視点から小学校における新体操の教材化を行うこととした。

4 ワークショップ形式の授業における集団化

4.1 授業構想

授業構想において、鈴木ら（2006）はワークショップ形式を導入した授業の基本的な下記の5つの留意点を提示している。

- 1) プロセスそのものを学習ととらえるので内容と方法を一体としてとらえ、授業づくり行う。
- 2) テーマ学習を導入し、「目標にとらわれない評価」を実践する。
- 3) 授業の流れを3つのステージから考える（①「情報の共有化」②「イメージを拡げる、アイデアを出し合う」③「願いを膨らませる」）
- 4) ワークショップのグループ形態は、ステージ段階および子どもの実態に応じて変化させる。
- 5) 教師自身のワークショップへの参加が科

学的合理性を保証することにつながる。

ただし、あくまでファシリテーターとしての役割を逸脱しないことが重要である。

この5つの留意点を踏まえ、「用具を操作する運動」と「表現」「リズムダンス」の視点からワークショップ形式の新体操の授業構想をおこなった。本授業構想では①子どもひとりひとりが、新体操の様々な用具を操作するおもしろい世界を探索する②様々な新体操の用具の中からさらに、深めたい用具を選択させ、選択した用具を操作するおもしろい世界を創発させる。さらに、グループ同士が互いにアイデアを見せ合い、互いに違うグループの用具のおもしろい世界を共有する。③これまでの内容を踏まえ、様々な用具を組み合わせクラス全体で用具を操作するおもしろい世界を共有する、といった3ステージによって授業構想した（表1）。

4.2 授業実践の展開

この授業では最初は個人で用具を操作する楽しさに夢中・没頭していた子どもたちが授業が進むにつれて、次第にその楽しさを仲間と共有しながら、仲間と一緒に用具を操作する楽しさを創造・発見していくと考えられる。そこで、まず、クラスを3つのグループに分け、新体操の3つの用具のそれぞれの用具を操作する楽しさにふれることとした。次に自分がさらに深めたい用具を選択し、そのグループ内での活動をおこなった。この活動を同じ用具を選択したグループで活動を共有しあう「同用具グループ内・

表1 授業の流れ

第1ステージ	第2ステージ	第3ステージ
<ul style="list-style-type: none"> ・学習の流れをつかむ ・用具を操作する活動の共有化 	①グループ内での共有化 選択したグループ内で選択した用具の楽しさを膨らませる	これまでの活動を受けクラス全体で願いを膨らませる。
	②グループ間での共有化 選択したグループ間で楽しさを共有化する	

ワーク」とした。また、グループ間での活動を共有しあう「同用具グループ間・ワーク」へと移行する。さらに、異なる用具を選択した子どもともグループを形成し、活動の共有を行う「異用具グループ内・ワーク」と移行し、その後グループ間で活動を共有しあう「異用具グループ間・ワーク」を行った。これらを表1の授業の流れの各ステージに位置づけ、展開していった。具体的には以下の通りである。

- ① クラスを3つのグループに分け、新体操の3つの用具それぞれの楽しさに触れるようにステーション学習を行う。
- ② 同用具グループに別れ、同用具グループ内で活動を共有し、新しい動きのイメージやアイデアを膨らませる。
- ③ 同用具グループ間・ワークとして、キャストとゲストにわかれ、同用具グループ間の活動を共有しあう。
- ④ 異用具グループ内で活動を共有し、自分たちの作品づくりを行う。
- ⑤ 異用具グループ間・ワークとして、各グループの作品を発表し、活動を共有しあ

う。

- ⑥ 教師や学習支援ボランティアの学生は、ファシリテーターとして授業に参加する。その際、子どもの動きの発想を豊かにし引き出させるような言葉かけや行動を心がける。

4.3 単元の学習過程

ワークショップ形式の授業の流れ表1を踏まえ、単元の学習過程は表2のように作成された。

4.4 授業実践の分析～Goal-Free Evaluation～

授業実践者が授業リフレクションをして、子どもの学びを振り返り、授業分析を行ったものに、もう一人の観察者の「Goal-free evaluation」の内容を加え、学習内容としての集団化に着目し、子どもの学びの変化を解釈した。

4.4.1 おもしろい世界の探索

第1時の授業では、子どもたちの、フープを腰や首でひたすら回したり、ひたすらボールをついたりするなどの行為を一心不乱に行っているという、夢中に用具を操作する姿が印象的で

表2 学習過程

時 分	1	2	3	4	5・6
0	オリエンテーション	集合・挨拶・準備運動・慣れの運動			
10	○学習の進め方を知る。	同用具グループ内で協力して、運動遊びをつくって楽しもう			異用具グループで様々な用具を組み合わせさせて楽しもう
20	○自分の力を知る。 いろいろな運動遊びを経験する。 ・なわ ・フープ ・ボール ・こんぼう ・リボン	・運動遊びの仕方を考え、グループで工夫する ・各自が動きながら、互いに見合い意見を出し合う			・グループでさまざまな用具を工夫して組み合わせさせてアイデアを出し合う。
30		同用具グループ間で自分のグループの楽しさを友達に伝えよう			音楽に合わせて楽しむことで、自分たちの作品をつくり発表しよう
40		・グループ内で前後半に分かれ、キャストとゲストに別れて進んで運動する。			・音楽に合わせてイメージを上げ、アイデアを出し合う ・自分たちの作品を互いに発表しあおう
		まとめ・整理運動・挨拶・後始末			単元のまとめ

ある。そこには子どもたちの用具に誘発され、それを操作することがおもしろくて、動きたくてたまらないという思いが溢れていたといえよう。

子どもたちは、学習支援ボランティアの学生の動きに興味を示しながら、用具を操作する活動を楽しんでいたのである。しかしこの時点では、誰かと合わせて楽しむといった協働して行うという意識は少なく、個人個人がその場における活動を楽しむことが主であったといえよう。

このように、第1時では、学習支援ボランティアの学生や、新体操の用具に誘発され、用具を操作するという経験を通して、おもしろい世界を探索する活動を行っている。そこで、このような子どもたちの学びを「用具を操作するおもしろい世界を探索する」として解釈する。また、このように解釈されたおもしろい世界を探索する学びにおける子どもたちの活動は、個人個人が自分のおもしろい世界に没入しているといえる。このような学びによって表出された活動は個人において了解されているといえ、個人化の学びであるといえる。

4.4.2 自分なりの新たなおもしろい世界

第2時・第3時とも、用具を操作する楽しみを味わいたいという思いが、子どもの意欲を掻き立て、授業に勢いをもたらせているといえよう。第2時では新しい用具としてリボンが与えられた。これは子どもたちにとってとても魅力的な用具であった。みんなが殺到し、投げる・振り回すといった活動に夢中になった。リボンのやわらかく自由な動きの中で、自分とリボンが相互作用しあい、それを操作したくてたまらないといった表情で子どもはリボンを一心不乱に振り回したり、回したりして楽しんでいたのである。リボン以外のフープやボールに関しても第1時同様に、ひたすら夢中に活動をしていったといえる。用具を操作する際の夢中に取り組む姿には話しかけることすら悪いような子どものパワーが感じられた。このような子どもたちの姿から用具を操作する運動を夢中に楽しんで

いることが読み取れる。

第2時では学習支援ボランティアの学生の動きのまねだけでなく、「これ見て」「これはどう?」「それはどうするの?」などの声が聞こえ、リボンで字を書いたり、寝転びながらリボンやボールを操作したり、自由に個人個人が創造性をもって主体的に活動する姿が見られ始めた。それは、学習支援ボランティアの学生の動きをまねすることから、個人個人が自ら自由に考え、新しい動きを創造・発見することで用具を操作するおもしろい世界を創発しようとしていると解釈した。またこの自由に自らが考えることが、周りの目やできる、できないにとらわれることなく、自らの課題を自由に持ち主体的に活動している子どもの姿を捉えることにつながったといえる。それは、他者との比較を意識させることなく、「できる」「できない」を気にせずに、思い切って自分の活動に取り組んでいる子どもたちの楽しさである。第2時における子どもたちの学びでは、おもしろい世界を探索していた段階から、新しいおもしろい世界を創発する変化が見られ「自分のおもしろい世界を創発している」と解釈できる。第2時における学びによって表出された活動では、探索をしながら、自分なりの新しい動きを創造・発見しおもしろい世界を創発している活動であるといえる。この活動は個人の中に了解している活動として捉えることができよう。したがって、個人化の学びであるといえる。

第3時においては、ともに声をかけあいながら技を見せ合ったり、互いに真似たり、教えあったりと、情報交換をしあい、その中で、自分たちのイメージを上げアイデアを豊かにしている子どもの姿を捉えることができる。このように、個人個人で用具を操作するおもしろい世界にいた子どもたちは、徐々におもしろい世界を創発していく中で、互いの創造・発見した活動の情報交換が行われ、互いにかかわり協働していく学びを捉えることができる。

これまでの授業において、探索した個人のお

もしろさを、仲間と相互に情報交換しあうことで、自ら新しいおもしろい世界を創発している様相を解釈することが出来る。つまり、第3時の子どもの学びを「創造・発見の情報交換による新たなおもしろい世界の創発」と解釈できる。第3時における学びによって表出された活動では個人の活動が主たる活動であるが、互いに技をみせあったり、教えあったりする行為の中で、自分なりの新たなおもしろい世界を創発する活動であるといえる。つまり、その活動が情報交換をすることにより、集団として了解されているといえ、集団化の学びであると捉えられる。

4.4.3 同用具グループでの同調するおもしろい世界

この第4時・第5時においては、同用具グループ内の活動が主たる活動であった。この中で、最初は技を互いに見せあったり、真似したりしている子どもの姿が見受けられたが、次第に、2人で同時にボールをつきあったり、フープを3人で同時に回したり、何人かで一緒にリボン回す動きを行ったりと、仲間とかわりながら取り組み、仲間と合わせて用具を操作する活動に浸っている子どもの姿が多く見られ始めた。それは、一人での活動に十分に楽しさを見出した子どもが、仲間とともに、用具を操作する楽しさを追及しようとする思いであると解釈することが出来る。また、同用具グループ内学習のときに「こうしてみよう！」「あれしよう！」などの声があがり、仲間とのかかわり合いの中で用具を操作するおもしろい世界を共に創造・発見していると解釈できる。この同用具グループ内での仲間とあわせる活動では、同じ動きや課題を同時に行うことでおもしろい世界を創発していると捉えられる。すなわち同用具において同調するおもしろい世界であるといえる。

さらに違うグループの演技や技を互いに見せ合うことで、友達の動きや、技を共有することが可能になり、共有が同用具グループ内だけでなく、同用具グループ間の枠組みでも行われて

いた。

この第4時・第5時において、子どもたちの活動では、同用具グループ内の仲間と同調する姿が印象的であるといえる。それは、「同用具グループの仲間との同調によるおもしろい世界の創発」として子どもの学びを解釈することができよう。このような学びによって表出された活動は、同調によるおもしろい世界の創発としての活動であり、同用具グループの仲間と共に了解されたものであるといえる。すなわち、集団化としての学びであるといえる。

4.4.4 異用具グループでの協調するおもしろい世界

第6時では、最後は発表会という形をとった。活動は異用具グループでの活動が主たる活動である。異用具グループでの話し合いは、時間が進むに連れて、互いに用具を持ちながら「わたしがこうやるから、〇〇ちゃんはその次にこうして」といったように、より動きに対する具体的なものになってきており、用具を操作する運動を追求しながら、この曲のここでこの動き、次にこの動きというようにグループで声をかけながら動ける子が増えてきた。また「この場面でボールを交換しよう！」「最後のポーズはこうしよう」「ここで回ってみよう」などのグループ内の多くの意見交換の中で、次第にみんなで何かを創りあげようという思いが高まっていった。この異用具グループ内での仲間とあわせる活動では、「ここはリボンが前で、ボールの人は後ろね」とか「ここはフープの見せ場にしよう」などという子どもたちの声に代表されるように、個人個人が違う動きをして、それをみんなの作品として協調しようとする活動であるといえる。つまり、違う用具の違う動きを、仲間と協調することで、自分たちの作品を創造・発見して、おもしろい世界を創発していると捉えられる。このように完成した作品は、「こうしたら楽しくなる」「次はもっとこうしよう」という子どもの思いが連続した作品であるといえる。遠山(1978)が、新体操の動きについて、形式化さ

れた動きではなく、人間の自然性を尊重することの重要性を示唆しているように、子どもたちは、形式的に動くのではなく、仲間との協調の中で新しい動きを自然に創造・発見し、作品が完成していったといえよう。

このように、子どもたちが「身体の動き」や「動きを曲にあわせる」「友だちと動きを合わせる」といったこと活動が現象として現れる中で、まさに自然に新体操っぽいものになっていった。また発表後は他のグループの良いところなどにも気づき、もっとこうしたいなどの意見も聞かれ、異用具グループ間での共有により、子どもたちのもっと、おもしろい世界を創発したいという思いがオープンエンドとして開かれていくのを感じた。

この第6時における子どもたちの活動は、違う用具の違う動きの仲間と、協調して作品を創りあげることである。この活動より「異用具グループの仲間との協調による新しいおもしろい世界の創発」と子どもの学びを解釈できる。また、このような学びによって表出された活動は、違う用具の違う動きの仲間と協調して行う活動であり、集団によって了解される活動である。それは集団化としての学びとして解釈される。

4.4.5 個人化から集団化への学びの変化

このように第1時から第6時の中で解釈された子どもの学びを第1時から第6時への変化として時系列的に解釈した。

表3からも分かるように、第1時から第2時の子どもの学びの変化は、「用具を操作するおもしろい世界の探索」に始まり、その中で自ら新しい動きを創造・発見し「おもしろい世界を創発」する変化として捉えられる。また第3時の学びでは、互いが創造・発見した用具を操作する楽しさを情報交換することで、また新たに、動きが創造・発見され、「新しい世界が創発」する変化である。これは、これまで一人の所有物であった、おもしろい世界を情報交換することで、拡がりを見せ学びを変化させたとして捉えられる。第4時・第5時では、これまで個人で行っていた活動を、同用具グループの仲間と同調して行うことで、子どもたちの学びが、仲間と「同調することで新しいおもしろい世界を創発」していると捉えられる。これは、互いに見せ合ったり、教えあったりしていた情報交換だけでなく、動きを同じ用具の仲間と同調して行うことで、おもしろい世界を共有のものとして拡がった変化であるといえる。第6時においては、違う用具の違う仲間と「協調することによって新しいおもしろい世界を創発」する学びへと変化し、違う用具や違う動きをする仲間と協調することにより、違ったおもしろい世界とおもしろい世界を共有し融合させさらにおもしろい世界を創発することへの変化であると捉えられる。

子どもの学びは、個人の探索から個人の創造・

表3 解釈された子どもの学び

	解釈された子どもの学び	活動の変化
第1時	「用具を操作するおもしろい世界を探索する」	個人が探索する
第2時	「創造・発見によるおもしろい世界の創発」	個人が創造・発見する
第3時	「創造・発見の情報交換による新たなおもしろい世界の創発」	仲間との情報交換を通してして創造・発見する
第4時	「同用具グループの仲間との同調によるおもしろい世界の創発」	仲間と同調し創造・発見する
第5時		
第6時	「異用具グループの仲間との協調による新しいおもしろい世界の創発」	仲間と協調し創造・発見する

発見を経て、情報交換による創造・発見へ、そして同調による創造・発見から協調による創造・発見へと、新しいおもしろい世界を創発しつづけることで変化しているといえる。この学びの変化に伴い、おもしろい世界が広がっていく中で、そのおもしろい世界の創発に対する活動は意味を変えていき、その意味の変化によって個人化から集団化への変化を捉えることができる。それは、第1時・第2時における学びによって表出した活動においては、個人化としての学びの意味であったが、第3時以降の学びによって表出した活動においては、集団化としての学びの意味に変化していることから捉えられよう。

このように活動、共有、活動という循環による学習が展開されることで、子どもにとって意味付与された学びに変化がおき、その学びの変化によって、学びによって表出される活動が集団として了解され集団化が生成されていくといえる。

5 結論

このように、本研究では「ワークショップ形式」の授業における、学びによって表出される活動の個人の了解としての個人化から、集団の了解としての集団化への変化を子どもの学びの変化において解釈することができた。またこの学びの変化によって集団化すること自体が、創発されたと捉えた。このような点に注目することで、集団で行うことで、楽しさを保障するという手段としての集団化ではなく、かかわり合いの中から楽しさを集団へと掲げていこうとする、目的的な集団化を捉えることができたと言える。さらに、このような見方は、教師が楽しさを提供するという役割から、ともに楽しさを創造・発見する協働行為者としての役割が重要であることを示唆するものであるともいえる。

今後は、このような見方にたち、さらに詳細に子どもの集団化へのプロセスを、他領域の実践的研究からも明らかにすることで、より具体

的に学習内容としての集団化に着目した授業づくりをする視点を提示していきたいと考える。

また、「用具を操作する運動」「表現」「リズムダンス」の視点からの新体操の教材としての可能性についても、さらに詳細に検討していく必要があると考える。

引用・参考文献

- 1) 細江文利 (2006) 「ワークショップ型」の導入で見えてきた「かかわり」を視点とした授業。子どもと体育、No.136 光文書院。pp.10-11.
- 2) 今村嘉雄・宮畑虎彦 編 (1976) 新修体育大辞典。不味堂出版。p.705.
- 3) 加茂佳子 (1978) 遠山喜一郎 著 女子の新体操。大修館書店。p.169.
- 4) 古賀泉 (2003) 2年 ボールゲームの授業。子どもと体育。Vol.122。光文書院。pp.6-13.
- 5) 小山厚子 (2002) 中学校・高等学校の体育 高校女子の選択授業「新体操」一輪を使つての集団演技(授業研究・内容と指導)。女子体育Vol.44、No.1：pp.16～19.
- 6) 田中聡 (2001) プール遊び・水泳。松田恵示・山本俊彦編『『かかわり』を大切にした小学校体育の365日』。教育出版。pp.66-67.
- 7) 文部省 (1999) 小学校学習指導要領解説体育編。東山書房。
- 8) Michael Scriven (1973) "Goal-free evaluation", in House, E. (ed.) School Evaluation : the politics & process, Mccutchan : pp.319-328.
- 9) 中野民夫 (2001) ワークショップ—新しい学びと創造の場—。岩波書店。
- 10) 榎山聡 (2001) 跳び箱運動。松田恵示・山本俊彦編『『かかわり』を大切にした小学校体育の365日』。教育出版。pp.92-93.
- 11) 日本体育学会 監修 (2006) 最新スポーツ科学辞典。平凡社。p.626.
- 12) 佐藤友久 編 (1978) 体操辞典。道和書院。p.109.
- 13) 鈴木直樹・塩澤榮一 (2006) ワークショップ形式を導入した「体力を高める運動」の実践提案。体育科教育学研究。第22巻第1号。pp.25-34.
- 14) 鈴木直樹 (2004b) 解釈的パラダイムに立つ体

- 育の学習評価に関わるコンセプトの検討。学校教育学研究論集。第9号。pp.57-61.
- 15) 鈴木直樹 (2004a) 体育科における授業改善の試行—小学校ポートボールの実践から—。愛知教育大学研究報告。第53輯。pp.15-23.
- 16) 田中勝行 (2007) 運動の楽しさや喜びを味わわせるための授業づくり～運動の意味を創り出す「かかわり合い学習」の研究を通して～。平成18年度さいたま市長期研修教員研修報告書。
- 17) 張瓊方・頭川昭子 (2000) 新体操における幼稚園・小学校低学年選手の身体表現。日本体育学会第51回大会号、p.386.
- 18) Thomas Ryan (2005) The Reflective Physical Educator. Detselig Enterprises Ltd.
- 19) 遠山喜一郎 (1978) 女子の新体操。大修館書店。p.5.
- 20) 山川寿夫 (2004) 泳ぎにつながる水慣れやゲームの授業。体育科教育第52巻第8号。大修館書店。p.30.
- 21) 山崎大志 (2006) ボール運動におけるワークショップ形式の授業づくり。子どもと体育、No.136 光文書院。pp.6-9.
- 22) 湯口雅史 (2007) 体育における学習内容の検討—ワークショップ型授業モデルの提案—。東京学芸大学大学院修士論文。
- 23) 鷺巣明喜 (1998) 学習意欲を高める体育指導に関する研究—跳び箱運動における魅力ある教材開発の工夫—。平成9年度埼玉県長期研修教員研究報告書。p.135.

(2007年9月19日提出)

(2007年10月19日受理)

A study on workshop style classes in grouping physical activities —A focus on application of the rhythmic gymnastics to teaching materials—

Daisuke MATSUMOTO, Naoki SUZUKI, Eiichi SHIOZAWA and Eriko HOSOKAWA

Keywords : Workshop style, Rhythmic gymnastics, Relationship

Abstract

The grouping physical activities are made the teaching materials as means to enjoy playing in many physical education classes. However, grouping as learning contents is important. Therefore, this study pays its attention to grouping as learning contents. The purpose is to clarify a change of the student's learning.

The objects were third grader students. And the teaching materials was rhythmic gymnastics in this study. The analysis method of an observer was goal-free evaluation and one of an educator was reflection.

As a result, students devoted to enjoyment to operate a tool alone at the beginning of classes. As classes advanced, students begun to create and discover enjoyment of the playing to operate a tool in groups.

The changes of student's learning were found the following.

- ①Students search personal enjoyment of playing.
- ②Students create and discover personal enjoyment of playing.
- ③Students create and discover the enjoyment of playing while exchanging information.
- ④Students create and discover while cooperating with other students.

From the above, it is clear that grouping is advanced as student's learning changes. Furthermore, it may be that the change of the student's learning is extending interesting world according to the circulation of doing activity and sharing.